

## 田母神俊雄前空幕長の論文を読んで

阿部哲夫

2008年11月20日

はじめに

友人の一人から田母神俊雄前空幕長の論文“我が国が侵略国家だったと云うのはまさに濡れ衣だ”のコピーが送られてきました。読んで感じたことのあれこれをまとめてみました。まだ田母神氏の論文をお読みでない方は、先ずそれをお読み下さい。その上で以下の小生の書いたものをお読み下さい。

\* 日本をもっと世界に発信しよう

日本人にはストレートに物事を表現しない傾向がある。日本人同士で話すときには謙譲の美德として評価されるこの特性も、国際場裏にあっては誤解の元、相互理解の促進を損なっている可能性が強い。

また日本人は自分から売り込むことははしたない。相手が自然に理解してくれることを良しとしているところがある。事実日本は国際的に正確に理解されていないし、日本人自身このことに不満を感じている。

日本の立場を説明し、弁護してくれているのも、最近では李登輝、黄文雄、マハティールと言った海外の人々で、日本人が表だって、まともに日本の立場とか事情とかを主張しているケースは少ない。今回の田母神俊雄氏のように然るべき立場にある人物が、日本の立場を今回のような形で開陳しているのは例外的で、貴重な試みと言えるのではないか。こうした日本人がますます現れて、日本人の考えが国際的に広く理解されて行くことは大いに望ましい。

我々日本人は、言葉のバトルを野暮なこととして避ける傾向がある。発言しないために相手に理解されず、こちら側にフラストレーションがたまり、堪忍袋の緒が切れたとばかりに突然手を出し、喧嘩・戦争になる。これが前回の大战の一つの背景だったと言えるのではないだろうか。

黙っていたために誤解が生じ、命を落とす喧嘩とか戦争になるのに比べれば、言葉で争いにケリを付ける方が遥かに優れたやり方と言えるのではないか。

日本は、自分達の立場をもっとストレートに発信する術を身につけなければならぬと痛感する。

田母神氏の論文は、こうした意味でも貴重な試みで、政府の見解と違うと言うだけで封じ込めるべき類のものではない。手を出すのに比べれば、口先の喧嘩は遥かに実害が少ない。口先だけの喧嘩など男のやるべきことではない、と言う美学は国際的には当面はやらないと考えた方がよいのではないだろうか。ブッシュ大統領一味のやらかしたイラク侵攻を見過ごした愚行を繰り返すべきではない。

#### \* 小生に見える世界の状況

小生に見えている日本を取り巻く世界の状況を、思うままに以下述べてみたい。

幕末日本が開国した当時世界を牛耳っていた国は、イギリス、フランス、オランダと言った所謂列強と言われた国々であった。彼等は、共通して経済面、技術面、軍事面で世界をリードしていただけてはならず、何れも植民地を持ち、その植民地からのアガリで国力を一層高めていた。

最近多くの日本人が世界旅行をしている。彼等の多くはイギリス、フランス、スペイン等のかつて列強と言われた国々に行き、その壮大豪華な建造

物とか美術品などに心奪われ、やっぱり欧米の先進国は素晴らしい、と感心して帰ってくる。実はこれら先進国の文明を生み出したものが莫大な富であり、その莫大な富を彼等にもたらしたのは、彼等が情け容赦なく植民地の現地人から搾取したものだ、という点には思い及ばないようである。

当時植民地を持つと言うことは、ドル箱を持つことを意味していた。そのためもあって各国とも植民地の獲得競争に鎬を削ったのであった。

言い換えれば、当時の富獲得の仕組みをビジネスモデルと考えれば、植民地を持つことは、その中で当然の必須アイテムとされていたのである。明治維新当時日本が先進国の仲間入りを試みたとき、日本は列強と言われた国々を研究し、これらの国々の政治制度、経済制度、教育制度等を見習うと同時に、彼等と同じように植民地を獲得管理することが、国の発展に不可欠のベスト・マネジメント・プラクティスであると考えたことは当然のことであり、全く不思議なことではなかった。

日本が満州、朝鮮を植民地としたのは、当時先進国とされたイギリス、フランス、スペイン、オランダ、ドイツ、それにアメリカが実行していたことを真似ただけのことであった。日本が世界の流れに逆らって、事新しく始めたことではなかった。事実日本の朝鮮併合が具体化しつつあった当時、朝鮮の代表がアメリカ等の代表と接触、日本の動きを牽制しようとしたことがある。こうした朝鮮の試みは、当時全く相手にされず、功を奏しなかったのである。

ここで日本の植民地統治と英仏と言った所謂列強の植民地統治の差異について触れておきたい。

私は少年期を満州新京で過ごした。日本は満州を一つの国家を建設す

るといふ心意気で作ろうとした。そのために満州国の建設には、一流の人材を配置し、巨額の資金を投入した。最新の産業政策を元に最新のインフラ整備を試みた。満州の首都新京の建設には当時世界最新の都市計画が応用され、日本でも一般には採用されていなかった地域暖房とか水洗便所等のシステムが導入された。鉄道も当時世界最速で冷暖房完備のアジア号が導入され世界の注目を集めた。

小生は日本の敗戦後半世紀経って新京を訪問し、満州当時の道路とか建造物が未だに立派に用を果たしている様を実見した。そして如何に日本の満州建設が腰を据えたものであったかを実感させられた。

その後数年して、かつてイギリスの植民地であったガーナを訪れた。そこでも植民地当時の鉄道が使われていたが、それは日本であれば軽便鉄道のようなものでしかなかった。今でも立派に活用されている満州の鉄道と比べれば、全くレベルの違うものであった。日本は満州でしっかりした国造りを目指したが、イギリスはガーナで速成の金儲けを狙ったのだ、と感じた。そして同じ植民地と言っても、日本の植民地とイギリスなど欧米の植民地とではどうも違うようだと感じたのであった。

したたかな商人国家イギリスは、最低の投資で最速・最大の収益を回収しようとし、一方バカ真面目な日本は、土作りから始める百姓宜しく真面目に基礎作りに努めた、と言えるのではないだろうか、と言うわけである。

最近喧伝されているグローバルスタンダードでは、最低の投資で最大の収益を得ることを良しとしている。グローバルスタンダードの考え方には、イギリスの植民地統治と一脈通じるものがあると言えるのかも知れない。日本の敗戦が決定的になったとき、中共軍の毛沢東は、蒋介石軍より一刻も早く満州を掌握せよ、と全軍に指令を出したと云われている。彼は当時の満州の充実振りを承知していたのである。事実当時満州には、満

州を含む中国全土の鉄道キロ数の半分以上が敷設されていた、と言われているのだ。

一般に、宗主国の人間は植民地の人間を見下している、と言えらると思われる。これは日本についても、イギリス、フランスについても当てはまることであろう。ただ日本人は支那人、朝鮮人を人間と見なしていたのではないだろうか。ところがイギリス人達は、どうもガーナ人を人間以下に見ていたように感じられたのだがどうだろうか。

日本政府は、最高学府として戦前九つの帝国大学を設立したが、そのうち二つは当時植民地であった朝鮮と台湾に設立した。朝鮮の京城に設立したのが九つの内の第六番目で 1924 年、台湾の台北に設立したのが第七番目で 1928 年であった。その後第八番目が内地の大阪で 1931 年、第九番目が同じく内地の名古屋で 1933 年と続いたのであった。本国での設立が完了する前に、植民地に帝国大学を設立したことに、日本という国の意識が感じ取れるのではないだろうか。

小生がアメリカのビジネススクールに留学していた当時、フランスから来ていたクラスメートに、フランスがアフリカなどで採った植民地政策が問題だと云ったことがある。ところが彼はシレッとして、俺達が植民地にしなかったら彼等は未だに野蛮人のママだったぜ、とのたまったのであった。お前達日本だってやったじゃないかと言った反撃を予想していた小生は、長らく植民地統治をやってきた彼等のしたたかさにつくづく驚かされたことであつた。

以上